

## VIII. 退職にあたって

退職のご挨拶

ゲノム細胞研究部門 ゲノム進化分野・平井 啓久

私は霊長類研究所で 26 年間教員として研究教育に携わりました。前職の熊本大学と合わせると 39 年間大学に勤めたこととなります。霊長研に助手として赴任した時はちょうど 40 歳になったところでした。赴任当初サル達の声を聞きながら仕事ができることに胸が躍ったことを覚えています。前職では医学部で寄生虫病学を専攻していましたので、自ずと病気に関わる研究を進めることが求められましたが、霊長研では自分の興味に基づいて自由な研究ができることに深い喜びを感じました。不惑の歳に霊長研に赴任できたことは研究内容を考え直す良いタイミングでした。

霊長研での 26 年間は集団遺伝分野、人類進化モデル研究センター／遺伝子情報分野、遺伝子情報分野、ゲノム細胞部門（ゲノム進化分野）と部署の異動や組織変更がありました。教授在任中は人類進化モデル研究センター長（4 年）、副所長（2 年：前職と併任）、および所長（4 年）を拝命し、研究以外のいろいろな経験をしました。総長をはじめとする大学執行部との会議や陳情・説明によって京都大学の内状を知ることができました。また、文科省や内閣府での種々の状況説明等で大学組織が何たるかを垣間見ることができました。これらの総務的な業務によって研究に集中できなかったことはやや悔やまれますが、組織や人とは何かを考えるよい機会だったと思います。

研究面では染色体の変化に連鎖した生物の進化を検討しました。端的に言えば「ヘテロクロマチンが織りなす染色体の進化」と括ることができます。寄生虫病学から霊長類学への転身は字面では大きな変化に見えますが、「病学」という冠がはずれ対象生物が変わっただけで基本的視点は変えることなく、染色体の研究を貫くことができました。各種霊長類の種特異的な染色体変異を解析することで、新たな染色体分化のメカニズムを検出することができました。海外調査も多くの機会をいただき、海外 20 ヶ国で実験や試料収集に励みました。研究の進捗によって国内外の多くの共同研究者と交流することができ、研究と人の輪を広げることができました。その「出会いと感動」が私にとって大きなパワーとなりました。退職前の 2 年間は悠々自適に研究に没頭することができ、研究の面白さ・楽しさを再認識して退職することができました。今後は晴耕雨読の生活を楽しみながら、たまったデータを論文文化していくつもりです。

霊長研での在職は私にいろいろな面で大きな発展をもたらしてくれました。研究には何でも自由に考えられる開かれた時空が必要だと思いますが、霊長研の自由闊達な気風は私にはとても有効でした。サル達の喧噪の中での研究は臨場感と充実感を高めてくれました。霊長研の更なる発展を祈念しつつ、感慨をこめて退職の挨拶とします。